

おどろく

【動カ四】

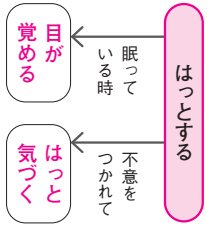
驚く

フレーズ

物の鳴りければ、ふとおどろく

イメージ

はっとする
「(物音に) はっとする」感じです。眠っている時なら「目が覚める」、不意をつかれて「はっと気づく」という意味になります。



- 1 目が覚める
- 2 はっと気づく

【関】おどろかす(動)
目覚めさせる

例文

- 1 物に襲はるる心地して、驚き給へれば、灯も消えにけり。
 ↓ 物音の怪に襲われた気がして、はっと目が覚めなされたところ、灯火も消えていた。
 【訳】秋が来たが目でははつきりとは見えないが、風の音を聞いて(秋だなど) はっと気づかせられたことだ。
 (古今和歌集)
- 2 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる
 ↓ 秋が来たが目でははつきりとは見えないが、風の音を聞いて(秋だなど) はっと気づかせられたことだ。

おこなふ

【動ハ四】

行ふ

フレーズ

明け暮れ行ふ僧
↓ 朝も夜も仏道修行する僧

イメージ

決まりごとを行う



「定まった形式にのって何かを行う」感じ。『仏道修行する』という意味が頻出です。

- 1 仏道修行する

【関】おこなひ(名)
仏道修行

例文

- 1 持仏据えたりまつりて行ふ尼なりけり。
 ↓ 持仏を安置申し上げて仏道修行するのは尼なのであった。
 (源氏物語)

- 1 飽かぬ別れ
- 3 顔のみまもる

たのむ

【動マ四/動マ下二】

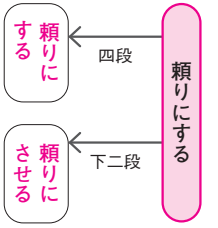
頼む

フレーズ

人を頼みて京に上る
↓ 人を頼りにして都へ行く

イメージ

「頼りにする」感じですが、活用によって誰が誰を頼りにするかが変わります。四段活用では、こちらが相手。「頼りにする」、下二段活用では、相手にこちらを「頼りにさせる」となります。



- 1 「四段」頼りにする
- 2 「下二段」頼りにさせる

例文

- 1 吾妻人こそ、言ひつることは頼まれる、都の人は、言受けのみよくて実なし。
 ↓ 東国の人、言ひつることは頼りにすることができるが、都の人は返事だけよくて、誠意がない。
 (徒然草)
- 2 待つ人は障りありて、頼めぬ人は来たり。頼みたる方は違ひて、思ひよらぬ道ばかりはかなひぬ。
 ↓ (来ることを) 待っている人は障害があって、(来ることを) 頼りにさせない人は来てしまう。頼りにする方面のことはあてがはずれて、思いがけない方面のことだけはうまくいく。
 (徒然草)

【プラス】基本的に「何かを行う」という意味なので、そのまま「行う」と訳す場合もあります。例えば「政を行ふ」はそのまま「政治を行う」と訳してかまいません。

- 1 満足しない別れ
- 2 この上なく寵愛を受ける人
- 3 顔だけをじっと見つめる

- 2 かぎりなく時めく人

- 1 月をめて花を眺めしいにしへのやさしき人はここにあらはら。
(徒然草)
- 2 物食ひ酒飲み、ののしり合へるに、
(枕草子)
- 3 按察使大納言の御むすめ、心にくくなべてならぬさまに、
親たちかしづき給ふこと限りなし。
(堤中納言物語)
- 4 あはれ、いかで芋粥にあかん。
(宇治拾遺物語)
- 5 帝、箏の琴をめでたく遊ばしけるも、御心に入れて教へなど、限りなく時めき給ふに、
(大鏡)
- 6 世の中にときめき給ふ雲客、桂より遊びて帰り給ふが、
(古今著聞集)
- 7 幼心地にも、さすがにうちまもりて、伏し目になりてうつぶしたるに、
(源氏物語)
- 8 寝入りたるほどに、門をたくにおどろかれて、
(蜻蛉日記)
- 9 猫のいとなごう鳴いたるを、おどろきて見れば、いみじうをかしげなる猫あり。
(更級日記)
- 10 年ごろ仏を頼みて行ふこと、やうやう年積もりになり。
(古本説話集)
- 11 君来むと言ひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬものの恋ひつぞ経る
(伊勢物語)
- 12 頼めしをなほや待つべき霜枯れし梅をも春は忘れざりけり
(更級日記)
- 13 心地にはかぎりなく妬く心憂く思ふを、しのぶるにまありける。
(大和物語)
- 14 ただ一度にいらへむも、待ちけるかともぞ思ふとて、
(宇治拾遺物語)
- 15 責めければ、責められわびて、さしてむと思ひなりぬ。
(大和物語)
- 16 暮れがたき夏の日ぐらしながむればそのこととなくも
のぞ悲しき
(伊勢物語)
- 17 藤壺宮、なやみ給ふことありて、まかで給へり。
(源氏物語)
- 18 日ごろ、月ごろ、しるきことありて、悩みわたるが、
おこたりぬるもうれし。
(枕草子)

訳

* ↓の数字は見出し語番号です。

- 1 月を**ほめて**花を眺め味わった遠い昔の風雅な人は、ここにおいての在原業平である。 ↓1
- 2 物を食ひ、酒を飲み、**大声で騒いで**いるのに、 ↓2
- 3 按察使の大納言の姫君は、奥ゆかしく並々でないご様子で、**親たちが大切に育て**なされることこの上ない。 ↓3
- 4 ああ、なんとかして芋粥を**満足する**ほど食べたものだ。 ↓4
- 5 帝は、箏の琴をみごとにご演奏なされるが、(それも)熱心にお教えになったりなどして、(女御は)この上もなく**ご寵愛をお受け**になっていらっしやいましたのに、 ↓5
- 6 世間で**時流に乗って栄え**なさっている殿上人が、桂から遊んでお帰りになるが、 ↓5
- 7 (少女が)幼心地にも、さすがに(尼君を)**じっと見つめて**伏し目になってうつぶむいてるところに、 ↓6
- 8 寝入っていたときに、門をたくく音で自然と**目が覚めて**、 ↓7
- 9 猫がともおだやかに鳴いたので、**はっと気づいて**見るとともかわいらしい猫がいる。 ↓7
- 10 何年もの間仏を頼りにして**仏道修行**することは、しだいに年が積もり重なった。 ↓8
- 11 あなたが来ようと言った夜がそのたびごとに(むなしく)過ぎてしまったので、**頼りにしない**ものの、(あなたを)恋しく思つて時を過ごしています。 ↓9
- 12 (あなたが私に)**頼りにさせた**ことをやはり待つのがよいだろうか。霜で枯れた梅の木も春は忘れなさいことだ。 ↓9
- 13 心の中ではこのうえもなく妬ましくつらく思っているのを、**我慢**しているのであった。 ↓10
- 14 ただ一度で**返事をする**のも、待っていたのかと(僧たちが)思つたいやだと考えて、 ↓11
- 15 責めたので、(男は)責められて**つらく思い**、そうしてしまおうと思つたようになってしまった。 ↓12
- 16 なかなか暮れない(長い)夏の日を一日中**もの思いにふけて**いると、これという理由もなく、悲しく思つたことよ。 ↓13
- 17 藤壺宮は、**ご病気に**なられて、(宮中より)退出なさった。 ↓14
- 18 何日も、何か月も、はっきりした兆候があつて、ずっと患い続けたのが、すっかり**病気がよくなった**のもうれし。 ↓15

1 所在なく**もの思いにふけて**いると
3 病気が少しく**よくなる**
2 長い間**病気になつて**いた男

□1 つれづれと**ながむる**に
□3 病、少しく**おこた**る
□2 久しく**なやみ**たる男

□1 御返事するとおぼして、うちおどろきたまひぬ。 ↓7

① 思いにふける

② 困惑する

③ 目をさます

□2 御母の更衣なやみ給ふことありき。おこたりもやり給はで、夏頃は、いとしも重うわづらはせ給へば、

〈往吉物語・立教大〉

ましまさつた。

□3 君と申しながらも、恥づかしげにおはすとは見奉らずや。

〈伊勢源氏十二番女合・センター〉

① 立派な様子でいらつしやる

② 恥さらしな様子でいらつしやる

③ 気がひける様子でいらつしやる

□4 四つにて別れに若君、おとなしくなりて、髪おひのび、肩のまはりうち過ぎて、ゆふほどになりたり。 ↓26

① 落ち着いて

② 堂々として

③ 大人らしく

□5 装束うるはしくしたる人の、太刀佩き、笏とりて、二間ばかり退きてかしまりてあたり。

〈平家物語・白百合女子大〉

① 派手な衣装を身につけた人が

② 束帯をきちんと着用した人が

③ 場にふさわしくない姿の人が

□6 寝くたれ髪の間う乱れたるを掻きやりつつ、恥づかしげにまぎらはしめたるまみのいとをかしげなるを、 ↓41

① しとやかな様子なのを

② こつけない様子なのを

③ かわいい様子なのを

□7 香を懐かしむ時鳥もやと待たせおはしますに、心づくしの一声もあかず恨めし。 ↓4

□8 母后、いとみじう時めき、皇子のおぼえもすぐれて、

母上(はは)の後は、とても並々でなくご寵愛を受けられ、皇子の(唐帝からの)ご寵愛も際立って、

隅(すみ)の間の高欄(たからん)におしかかりて、御前(みまへ)の庭(にわ)をも、御簾(みす)の内(うち)をも見わたしてながめたまふ。 ↓13

□9 公忠(きんちゆう)の右大弁(みぎおほひん)の子に、観教僧都(くわんきょうそうどう)と寛祐君(かんすうきみ)といひける人に、兄弟(けいだい)たり具して、竹生島(たけなまじま)といへる所へまかりけるに、 ↓21

公忠(きんちゆう)の右大弁(みぎおほひん)の子に、観教僧都(くわんきょうそうどう)と寛祐君(かんすうきみ)といひける人がいたが、兄弟(けいだい)が二人連れ立って、竹生島(たけなまじま)といわれている所へ参った時に、

□10 公忠(きんちゆう)の弁(ひん)の子に、観教僧都(くわんきょうそうどう)と寛祐君(かんすうきみ)といひける人に、兄弟(けいだい)たり具して、竹生島(たけなまじま)といへる所へまかりけるに、 ↓21

公忠(きんちゆう)の右大弁(みぎおほひん)の子に、観教僧都(くわんきょうそうどう)と寛祐君(かんすうきみ)といひける人がいたが、兄弟(けいだい)が二人連れ立って、竹生島(たけなまじま)といわれている所へ参った時に、

□11 この馬、同じさまなる馬を多く具して来にけり。いとありがたきことなれば、親しき、疎(と)き、喜(よろこ)びをいふ。 ↓22

□4 四つにて別れに若君、おとなしくなりて、髪おひのび、肩のまはりうち過ぎて、ゆふほどになりたり。 ↓26

① 落ち着いて

② 堂々として

③ 大人らしく

□5 装束うるはしくしたる人の、太刀佩(たちば)き、笏(しやく)とりて、二間ばかり退きてかしまりてあたり。

① 派手な衣装を身につけた人が

② 束帯をきちんと着用した人が

③ 場にふさわしくない姿の人が

□6 寝くたれ髪の間う乱れたるを掻きやりつつ、恥づかしげにまぎらはしめたるまみのいとをかしげなるを、 ↓41

① しとやかな様子なのを

② こつけない様子なのを

③ かわいい様子なのを

□7 香を懐かしむ時鳥もやと待たせおはしますに、心づくしの一声もあかず恨めし。 ↓4

□8 母后、いとみじう時めき、皇子のおぼえもすぐれて、

母上(はは)の後は、とても並々でなくご寵愛を受けられ、皇子の(唐帝からの)ご寵愛も際立って、

隅(すみ)の間の高欄(たからん)におしかかりて、御前(みまへ)の庭(にわ)をも、御簾(みす)の内(うち)をも見わたしてながめたまふ。 ↓13

□9 公忠(きんちゆう)の右大弁(みぎおほひん)の子に、観教僧都(くわんきょうそうどう)と寛祐君(かんすうきみ)といひける人に、兄弟(けいだい)たり具して、竹生島(たけなまじま)といへる所へまかりけるに、 ↓21

公忠(きんちゆう)の右大弁(みぎおほひん)の子に、観教僧都(くわんきょうそうどう)と寛祐君(かんすうきみ)といひける人がいたが、兄弟(けいだい)が二人連れ立って、竹生島(たけなまじま)といわれている所へ参った時に、

□10 公忠(きんちゆう)の弁(ひん)の子に、観教僧都(くわんきょうそうどう)と寛祐君(かんすうきみ)といひける人に、兄弟(けいだい)たり具して、竹生島(たけなまじま)といへる所へまかりけるに、 ↓21

公忠(きんちゆう)の右大弁(みぎおほひん)の子に、観教僧都(くわんきょうそうどう)と寛祐君(かんすうきみ)といひける人がいたが、兄弟(けいだい)が二人連れ立って、竹生島(たけなまじま)といわれている所へ参った時に、

□11 この馬、同じさまなる馬を多く具して来にけり。いとありがたきことなれば、親しき、疎(と)き、喜(よろこ)びをいふ。 ↓22

□12 女房の局々まで、御心とどめさせたまひけるほどしるく見えて、いとあらまほしげなり。 ↓36

□13 婿(むこ)どらるるも、いとほしたなき心地すべし。 ↓39

□14 その後、おぼつかなかりければ、かの導師の聖人、あとを追って訪ねて行ってみると、

□15 舅(うぢ)は、いとほしと思ひて、「この代はりには、わが持たたる宝を奉らん」と言ひて、めでたくかしづきければ、 ↓43

舅(うぢ)は(婿(むこ)を)気の毒に思つて、「この代わりには、わたしの持っている宝を差し上げよう」と言つて、すばらしい大切にしたので、

□12 女房の局々まで、御心とどめさせたまひけるほどしるく見えて、いとあらまほしげなり。 ↓36

□13 婿(むこ)どらるるも、いとほしたなき心地すべし。 ↓39

□14 その後、おぼつかなかりければ、かの導師の聖人、あとを追って訪ねて行ってみると、

□15 舅(うぢ)は、いとほしと思ひて、「この代はりには、わが持たたる宝を奉らん」と言ひて、めでたくかしづきければ、 ↓43

舅(うぢ)は(婿(むこ)を)気の毒に思つて、「この代わりには、わたしの持っている宝を差し上げよう」と言つて、すばらしい大切にしたので、

□16 舅(うぢ)は、いとほしと思ひて、「この代はりには、わが持たたる宝を奉らん」と言ひて、めでたくかしづきければ、 ↓43

舅(うぢ)は(婿(むこ)を)気の毒に思つて、「この代わりには、わたしの持っている宝を差し上げよう」と言つて、すばらしい大切にしたので、

□17 舅(うぢ)は、いとほしと思ひて、「この代はりには、わが持たたる宝を奉らん」と言ひて、めでたくかしづきければ、 ↓43

舅(うぢ)は(婿(むこ)を)気の毒に思つて、「この代わりには、わたしの持っている宝を差し上げよう」と言つて、すばらしい大切にしたので、

□18 舅(うぢ)は、いとほしと思ひて、「この代はりには、わが持たたる宝を奉らん」と言ひて、めでたくかしづきければ、 ↓43

舅(うぢ)は(婿(むこ)を)気の毒に思つて、「この代わりには、わたしの持っている宝を差し上げよう」と言つて、すばらしい大切にしたので、

□19 舅(うぢ)は、いとほしと思ひて、「この代はりには、わが持たたる宝を奉らん」と言ひて、めでたくかしづきければ、 ↓43

舅(うぢ)は(婿(むこ)を)気の毒に思つて、「この代わりには、わたしの持っている宝を差し上げよう」と言つて、すばらしい大切にしたので、

□20 舅(うぢ)は、いとほしと思ひて、「この代はりには、わが持たたる宝を奉らん」と言ひて、めでたくかしづきければ、 ↓43

舅(うぢ)は(婿(むこ)を)気の毒に思つて、「この代わりには、わたしの持っている宝を差し上げよう」と言つて、すばらしい大切にしたので、

□21 舅(うぢ)は、いとほしと思ひて、「この代はりには、わが持たたる宝を奉らん」と言ひて、めでたくかしづきければ、 ↓43

舅(うぢ)は(婿(むこ)を)気の毒に思つて、「この代わりには、わたしの持っている宝を差し上げよう」と言つて、すばらしい大切にしたので、

□22 舅(うぢ)は、いとほしと思ひて、「この代はりには、わが持たたる宝を奉らん」と言ひて、めでたくかしづきければ、 ↓43

舅(うぢ)は(婿(むこ)を)気の毒に思つて、「この代わりには、わたしの持っている宝を差し上げよう」と言つて、すばらしい大切にしたので、

□23 舅(うぢ)は、いとほしと思ひて、「この代はりには、わが持たたる宝を奉らん」と言ひて、めでたくかしづきければ、 ↓43

舅(うぢ)は(婿(むこ)を)気の毒に思つて、「この代わりには、わたしの持っている宝を差し上げよう」と言つて、すばらしい大切にしたので、

□24 舅(うぢ)は、いとほしと思ひて、「この代はりには、わが持たたる宝を奉らん」と言ひて、めでたくかしづきければ、 ↓43

舅(うぢ)は(婿(むこ)を)気の毒に思つて、「この代わりには、わたしの持っている宝を差し上げよう」と言つて、すばらしい大切にしたので、

□25 舅(うぢ)は、いとほしと思ひて、「この代はりには、わが持たたる宝を奉らん」と言ひて、めでたくかしづきければ、 ↓43

舅(うぢ)は(婿(むこ)を)気の毒に思つて、「この代わりには、わたしの持っている宝を差し上げよう」と言つて、すばらしい大切にしたので、

□26 舅(うぢ)は、いとほしと思ひて、「この代はりには、わが持たたる宝を奉らん」と言ひて、めでたくかしづきければ、 ↓43

舅(うぢ)は(婿(むこ)を)気の毒に思つて、「この代わりには、わたしの持っている宝を差し上げよう」と言つて、すばらしい大切にしたので、

□27 舅(うぢ)は、いとほしと思ひて、「この代はりには、わが持たたる宝を奉らん」と言ひて、めでたくかしづきければ、 ↓43

舅(うぢ)は(婿(むこ)を)気の毒に思つて、「この代わりには、わたしの持っている宝を差し上げよう」と言つて、すばらしい大切にしたので、